

成高ヒストリー その5

高校3年生の日本史受験対策のため、しばらく休載していました。大学受験にのぞもうとする受験生の皆さん、あと少しです。頑張ってください。また、本校を受験する小・中学生の皆さん、実力が発揮できるよう、お祈りしています。

さて、今回は成田英漢義塾・成田中学校が設立された頃の様子を、より大きな視点で視てみたいと思います。

英漢義塾が設立された明治20(1887)年には、大同団結運動、三大事件建白運動が起きました。自由民権運動は、明治15(1882)年の福島事件以来急進化し、明治17(1884)年の秩父事件でその急進化の最高潮を迎え、政府による弾圧がくり返される中で、次第に衰退していきました。しかし、明治14(1881)年の「国会開設の勅諭」で公約された、10年後の国会開設の時期が次第に近付くと、後藤象二郎(かつて坂本龍馬とともに大政奉還を画策した土佐藩士でしたよね)が大同団結を唱えて、何かと反目していた自由党と立憲改進黨といった民権派勢力の結集をはかりました。そして、鹿鳴館外交と称される井上馨外相の条約改正交渉の失敗もあいまって、政府をすどく批判し、「地租の軽減」「言論・集会の自由」「外向失策の挽回」を求めて、全国の民権派の代表者が建白書をたずさえて政府諸機関に陳情運動を展開した「三大事件建白運動」へ発展したのです。

その後、明治22(1889)年に大日本帝国憲法が公布され、翌年には最初の帝国議会が開会しました。そして、明治26(1893)年まで、民党と呼ばれた自由党・立憲改進黨と藩閥政府が激しく対立しました。これを、初期議会といいます。まさに政治の季節だったのです。この連載の3回目でも紹介しましたが、初代の塾長宮村三多を迎えた頃の、塾生達の演説に対する熱気はこのような背景によるものでした。

それが大きく変わったのが明治27(1894)年の日清戦争でした。開戦と同時に政党は政府批判を中止し、議会は戦争関係の予算・法律案をすべて承認しました。戦後になると内閣は政党と提携を進めるようになりました。明治31(1898)年10月に成田中学校は開校し、同33(1900)年6月に開校式が挙行されましたが、この時に出席した樺山資紀は、旧自由党の憲政党を与党する第2次山県有朋内閣の文部大臣でした。同年には立憲政友会が結成されて、議会を基盤とする内閣の組織がはかられました。

海外に目を向けると、この年には清において、排外主義団体の義和団が北京の列国公使館を包囲した義和団事件が起こり、翌年には列国に対して巨額の賠償金と公使館所在区域の治外法権と公使館守備のための軍隊の駐留を承認した北京議定書が結ばれました。その結果、ロシアが「満洲」とよばれた中国東北部を事実上手中におさめ、朝鮮半島を押さえようとしていた日本と対立が深まりました。こうして、明治37(1904)年2月に日露戦争が始まったのです。

明治37年1月12日発行の成田中学校「校友会誌」第1号には、次のような記事があります。

「英雄の事業」

(前略) 或は百萬の蒼生を塗炭の苦中に救ひ、或は壓制政治下の人民をして自由の空気を呼吸せしめ、或は國權を伸張すること能はずして他國に統國せられ常に其氣息を窮ひて喜懼をなすの弱國を助け、其奴隸視せられたる人民をして独立の天地間に遊行せしむるが如きは、これ天下英雄の大事業にあらずや。(中略) 今日には実に事業をなすの好時節なり。見よ!!!五大州能く好を通じ隣邦能

く和を結ぶと雖も、其内心は豺狼の如く常に他を蚕食して飽腹を逞うせんとするの欲望を包蔵せり。頃ろ露は既に戦意を我れに表はせるにあらずや。我国老成の英志あらば何ぞ風雲を叱し狼奴を馳して満州の野に大日本帝国新藩図の票木を立植せざる。(後略)

明治時代の文章はまだむずかしいですね。大体の内容を説明します。「蒼生」は人民、「壓制」は無理やりおさえつけること、「国権」は国家の支配力のことです。前半は清国と朝鮮(当時は大韓帝国)のことを指しているのでしょう。欧米列強の圧迫に対抗するために、アジア諸民族の団結を説いた「大アジア主義」の影響を受けているようです。「五大州」はアジア・アフリカ・ヨーロッパ・アメリカ・オセアニアで世界のことを、「豺狼」はやまいぬとおおかみで残酷で貪欲なさまを、「逞う」は「たくましく」と読んであからさまに表に出すことをいいます。当時の欧米列強による植民地獲得競争、つまり、19世紀後半の帝国主義の状況を指しています。この記事は卒業生によるものですが、日露戦争直前に見られた対露主戦論の影響もあってか、ロシア帝国に対する日本人の敵意は、ごく普通の人にまで広がっていた様子が分かります。

また、次のような記事もありました。

「発火演習」

(前略) いでや露西亜の都セントペートルズブルグ、一撃にして彼の憎い貪欲極まる露西亜を一泡吹かしてやれと云ふ勢は、恰も彼の北風凜烈肌をつんざく西比利亜原頭遠征の様である、銃を肩にし剣を腰にしたる健児は一声の下に集りぬ、(後略)

発火演習は、当時の中学校で行われた軍事教練の中で行われた実戦的な演習です。ここにある発火演習は、前年の11月21日に行われたものと考えられ、この日の「学校日誌」に「本日第三学年級以上ノ生徒ヲ演習部隊ト、第二学年級以下ノ生徒ヲ見学隊ト編成シ、午前九時ヨリ成田町停車場ヨリ酒々井町中川ニ通スル道路及其附近ノ原野ニ於テ、浸入及ヒ国防ノ法略ヲ以テ空包発火演習ヲ施行ス、午後一時三十分全ク中川北方ノ高地ニ於テ演習終了シ、三十分休憩ノ後宗吾ヲ経テ全四時帰校ス」とあることから、今の宗吾霊堂近辺の原野で行われたようです。「セントペートルズブルグ」は今のサンクトペテルブルクで、ロシア帝国の都でした。「西比利亜」は「シベリア」と読みます。日本では開戦前よりロシアに対する敵意が醸成されていたことがわかります。

「学校日誌」の記述をもう少し追ってみましょう。2月10日には「本日海軍開戦勝利ニ快報新聞ニ出ズ、之レ我軍第一戦ノ事ナラン」とあります。これは、前日の朝鮮半島仁川沖海戦の勝利を指しているものと考えられます。続いて翌日11日には、紀元節の祝賀式が9時30分より行われましたが、宣戦の詔勅が発せられたのを受けて、「勝利ヲ祝スル為メ午後六時ヨリ提灯行列」を行った、とあります。さらに、13日には「宣戦詔勅奉読式ヲ兼ネ、内務大臣、文部大臣ノ戦時ニ対スル訓令ヲ雨天体操場ニテ生徒一同ニ読ミキカセ」ています。

5月22日には、成田町が主催する提灯行列に参列しました。「鴨緑江の戦い」の勝利を受けて行われたものと考えられます。この戦いは4月29日~5月6日にかけて展開されたもので、ロシア陸軍との最初の本格的な戦闘に勝利した日本軍は、遼東半島に上陸に成功しました。提灯行列のコースは、成田山本堂から山門前へ進み、坂を上って薬師堂前を右に曲り、埴生神社まで行きます。その後、成田山裏から今の出世稲荷の前を通って参道に戻り、成田停車場(現JR成田駅)に行きます。到着したらまた戻り、成田幼稚園の前を通って鍋店本店前を経て成田中学校に向い、成田山に戻りました。成田の地理に詳しい方なら、町内をまさにくまなく回った様子が分かってもらえるでしょう。学校への帰着は、日をまたいで深夜の1時過ぎでした。強力なロシア陸軍に初めて勝利をしたことへの熱狂ぶりが伝わってくるかのようです。このようにして、戦争に対する国家と国民の一体感が演出されていきました。

日露戦争は、翌年の8月にアメリカのポーツマスで講和の交渉に入り、9月5日に講和条約が調印されました。その後、明治43(1910)年に韓国併合が行われました。その間の世相は、生徒の思考にどんな影響を与えたのでしょうか。明治44年6月5日発行の「校友会誌」第9号に掲載された4年生(旧制中学では5年生が最上級生です)の文章を見てみましょう。

「奮闘」

(前略) 奮闘は吾人の生命である。奮闘なくして人生の事、活気なく奮闘なくして国家は滅亡してしまう。印度、朝鮮、埃及、悉く好適例ではないか。吾人の努力、如何は直ちに国家に影響するのである。吾人の体は国家の所有物である。然るに現今の日本は滔々たる文明の侵入につれて、浮薄の気上下に満ち全身の勢力を虚飾虚栄にのみ費す輩が増加して来た。そして無為徒食、国家の財を吸収して自分は何等の貢献をなさぬ。所謂油虫である。油虫は発生して次第に草木を枯死せしめる。国家も亦、其の数を免れない。(後略)

「印度」は「インド」、「埃及」は「エジプト」です。念のために、インドとエジプトの当時の様子を説明しましょう。インドではその大半が、19世紀の半ばにイギリスの支配下になりました。1877年にはヴィクトリア女王がインド皇帝を兼ねるインド帝国が成立します。しかし、イギリス本国の利益を第一とする開発が進められたため、これに反発した民族運動が起こります。イギリスは硬軟織り交ぜながらこれを抑えようとしますが、運動はさらに激化していました。ちなみに、皆さんがよく知っているガンディーは、第一次世界大戦後に活躍しますので、まだ登場しません。

エジプトは19世紀後半から、経済的にイギリスに従属するようになりました。これに反対する武装蜂起が起こりますが、これも鎮圧されてイギリスの保護国になります。インドやエジプト、そして朝鮮が他国の支配を受けるようになったのは、個人レベルでの「奮闘」がなかったからだ、ということですが、行間を読むならば、日本は個人レベルでの「奮闘」があったからこそ、ヨーロッパ列強の一角であったロシアを破ることができたのだ、と考えているようです。

ところが、最近の日本は「文明の浸入」により「浮薄の気上下に満ち全身の勢力を虚飾虚栄にのみ費す輩が増加して来た」というのです。ちょうど、日本では産業革命が進展して工業化が進み、都市において賃金労働者が急速に増えているころでした。小学校の就学率が明治40(1907)年には97%を超えてほとんどの国民が文字を読めるようになるとともに、中学校の生徒数も伸びたために知的レベルの向上が一般勤労者の間で見られるようになりました。その結果、新聞や雑誌のようなマス＝メディアが発達し、浅草のような盛り場では落語や大衆演劇の上演が盛んになりました。大正時代に花開く、大衆文化の胎動が始っていたのです。このような風潮に対して、筆者であるこの生徒は危機感を抱いているようです。「吾人の体は国家の所有物である」と考えるこの生徒にとって、このような風潮は亡国の兆しにしか見えなかったのでしょうか。明治20年代までの民権の伸張を求めた頃の熱気と比べると、その落差に驚かされます。10代の少年特有のロマン主義的傾向とも読み取れるでしょうが、それよりも、日清・日露戦争を通じて、国家と自分を重ね合わせ、世界をより身近に感じるようになったからではないでしょうか。と同時に当時の日本人は、ロシアに勝利した日本に勇気づけられて立ち上がろうとした人々に対して、同情するどころか、植民地支配を受けるのは自業自得といわんばかりの冷ややかさで見つめるようになったともいえるでしょう。

今回はここまでとします。

(深田富佐夫)